＜口腔の役割＞

桐生にもトラがいた

ネコ科のトラは完全な肉食動物。獲物を狩るために必要な牙、歯、爪を備え、しなやかな身体と強い脚力を持ちます。草食動物やヒトを含めた雑食動物のように食物を磨り潰す役目の奥歯（臼歯：きゅうし）を持たず、代わりに奥歯は肉を裂き、骨を砕くために特化した鋭利な“切断歯”を備えます。ヒトの咀嚼は食物を磨り潰す為、下顎は複雑な円運動をしますが、トラは開閉運動のみで十分。顎関節は単純な構造で顎の筋肉（咬筋：こうきん）が発達しているので、まずヒトのように顎関節症になることはないでしょう。

トラが獲物を狩るのは一瞬です。迷彩をまとい、一切の無駄を省いた身体で俊敏に飛びかかり鋭利な犬歯で仕留め、終始、静かに事をなします。

そんなトラの特徴と食性から、古くから「虎は飢えても死したる肉を食わず」のことわざがあるように「潔癖な人はたとえどんなに困っても、不正なものは受け取らない」の意味として使われ、トラの強さに加え、偉大さ、優秀さを称えていたのかもしれません。

元来トラは日本には生息せず、はるか昔、大陸からの渡来人によってその存在をもたらされました。今に残る掛け軸や屏風、襖絵の虎も多くは当時の絵師が本物のトラを見て確かめることなく、日本に持ち込まれた毛皮などを参考に描かれたことから、耳や爪などの描写が実物とはかけ離れたものになってしまったそうです。

さてそんなトラですが近年、日本でも化石が産出され、数万年～40 万年前には生息していたことがわかりました。化石は青森県下北半島、栃木県葛生、静岡県浜松市、山口県伊佐、大分県津久見など全国十数か所から発見されましたが、実はこの中に群馬県桐生市も含まれます（参考）。

当時の日本は大陸と陸続きで 100 種を超える哺乳類が生息していたといわれます。その後の気候変動と寒冷化により、トラを含む半数以上の動物が絶滅したため、今、日本に生存する哺乳類はこの時代の生き残りといわれています。

トラが生息する場所はおそらく深い森の中。当時のヒトは自然への恐怖を感じていたことでしょう。トラの犬歯の化石が発掘されたのは桐生川上流域。幼少時、梅田で川遊びをした経験のある人も多いと思います。遥か昔、縄文時代やさらにその祖先にあたる桐生の人々はこの地でトラと決死の戦いをしていたのかもしれません。

トラの頭蓋骨

上下の犬歯が発達し、奥には切断歯を備えます

トラの犬歯の化石が発掘された付近の蛇留渕橋上流の桐生川清流

（参考）

群馬県桐生市蛇留淵洞から産出したトラとニホンザル化石

長谷川善和、岡部　勇、宮崎重雄ら

群馬県立自然史博物館研究報告（17）：55-60, 2013

【歯科口腔外科診療部長　今井　正之】